ベルフェゴールが屋根裏部屋のベッドの上で毛布にくるまって魔界の大寒波の寒さに震えていると部屋のドアを叩く音が聞こえた。
「どうぞ」
ベルフェゴールがドアに向かって声をかけると、伊吹がポットカバーで保温されたポットとベルフェゴール専用と自分専用のマグカップを持って現れた。
「寒いだろうと思って紅茶持ってきた」
「ありがとう」
マグカップに注がれた紅茶を一口飲むとほんのりとだが体が温まったような気分になった。
しかし紅茶の温かさは気分だけで終わり根本的な解決方法にはならなかった。
「う〝う〝う！」
ベルフェゴールが体を小さく震わせながら毛布をかぶり直すと毛布のスソをめくって伊吹が潜り込んできた。
伊吹はもぞもぞと動きながらベルフェゴールの横に来た。
「ちょっと何？僕今凄く寒いんだけど？」
「だから・・・一緒に温まろうと思ってきた」
そう言いながら伊吹がベルフェゴール体にしがみつくとふわっと心地よい体温がベルフェゴールを包んだ。
「ベルフェ凄く冷たい。お風呂にでも入ってきたらどう？」
「・・・この状況で風呂に入ったら凍っちゃうよ」
「そんなに寒いの？」
伊吹の言葉を聞いてベルフェゴールは小さく眉間にしわを寄せた。
「あんたはまだ寒くないのかい？」
「・・・うん。まだ平気」
伊吹の言葉を聞いてベルフェゴールは深くため息をついた。
「人間は良いな。こんなに寒いのに平気だなんて」
「そう言えばベルフェ、あの暖まる方法何か思いついた？」
「あの方法？・・・・ああ、気分が高揚すると魔界の寒波は平気になるって奴ね」
「そう。まだ気分が高揚していないのベルフェだけ」
「・・・もしかして他の奴らはもうあんたに気分が高揚するような事してもらったの？」
「うん。ルシファーは・・・」
「聞きたくない」
ベルフェゴールはきっぱりと突き刺さるような口調でそう言うと、驚いた顔をしている伊吹をチラッと横目で見てから視線を外した。

「ベルフェ、もしかしてやきもち焼いているの？」
「そんなんじゃない」
ムキになったような言い方をするベルフェゴールに伊吹はにこりと微笑むと再びベルフェゴールに抱きついた。
「大丈夫だよベルフェ。気分が高揚することって言ってもレヴィから推しの話聞いていただけだったり、アスモと踊ったりしていただけだから」
「ルシファーはどうしたんだよ」
「ルシファー？」
「そう。あいつはどんな風に気分を高揚させてきたんだよ？」
本当はルシファーの動向が気になって仕方ないのか、先程聞きたくないと言っていたのにベルフェゴールは伊吹に言葉を続けるようにうながした。
「ルシファーとは、温かいデモナス飲みながら話をしていただけだよ？」
「・・・それで終わったの・・・？」
「それで終わったって・・・終ったけど？」
伊吹がそう言うとベルフェゴールは伊吹の体をベッドに押し倒し突然唇を重ねて来た。
「！？」
伊吹が突然の展開に戸惑っているとベルフェゴールの口からは下が突き出され伊吹の唇と歯をくすぐるように舐めた。
条件反射のように伊吹の唇と歯が薄く開かれベルフェゴールの舌を受け入れた。
「ん・・・・・」
ベルフェゴールの舌先が伊吹の歯を超えて裏側に隠されていた伊吹の舌先に触れる。
それを合図に伊吹の舌先はベルフェゴールの舌に向かって延ばされ互いの唇が重なり合う場所でベルフェゴールの舌先に触れた。
「ふ・・・・」
ベルフェゴールの唇が伊吹の唇に押し付けられ触れ合った舌先はたわむれるように互いを舐め合う。
時にぶつかり合いながら、時に絡み合いながら、そして時に吸い付きながら。
ベルフェゴールの唇が伊吹の唇から離れた瞬間、二人の間には互いの唾液が混ざり合ったものが糸のように細く伸びぷつりと切れた。
「・・・はあ・・」
伊吹が小さくため息をつきながらベルフェゴールを見上げると、口では否定しながらも嫉妬心があるのか少し怒っているようにも見える顔をしていた。
「僕はこれで気分を高揚させてもらいたい」
一言そう言うとベルフェゴールは伊吹のシャツをまくり上げ乱暴に伊吹の下着をあらわにした。